

当たり前な事を伝えていく事の大切さ 魔法の種の意味

中邑賢龍

今から 25 年も前になる。私はウィスコンシン大学マジソン校にある Trace センターで支援技術の研究を行っていた。所長の Gregg Vanderheiden は第一人者として、当時 OS に標準実装されていなかったアクセシビリティ機能の標準化に向けて世界中を飛び周り、所内は活気に溢れていた。全米各地で CSUN カンファレンスや Closing the Gap カンファレンスなどの展示会やセミナーが開かれ、それらの会場は普及して来たパソコンで障害のある子ども達の学習や生活が大きく変えられると信じる人たちで溢れていた。新しい技術が展示会に行けば次々に紹介されるワクワク感が当時はあった。

しかし、その後、OS へアクセシビリティ機能が組み込まれ、それが当たり前になると、セミナーも展示会も次第に下火になり、重要な技術を伝える機会が大幅に減っていった。残念ながらわが国の教員養成系学部の講義の中に支援技術という科目を抱えている大学はほとんど存在しない。その結果として、アクセシビリティ機能に触れる事のないまま特別支援教育の現場に立つ若手教員も多い。固定キーやフィルターキーなど OS のアクセシビリティ機能を知らずに身体障害のある子ども達に ICT 機器を与えて、操作の努力を強いている現場があるのも事実である。アクセシビリティ機能が当たり前になった事に安心してしまい、それを伝える大事な作業を忘れてしまっていた結果である。

魔法のプロジェクトもタブレットを使った実践事例が蓄積し、そのレベルも上がってきた。その実践に最初から参加する先生達はレベルの向上に気づかずにどんどん先を目指して走っている。その結果、魔法のプロジェクトの現場で当たり前ようになってきた基本的な実践が、若手には全く伝わっておらず、ハードルが高くなっている部分がある。当たり前な事だからこそしっかり若い人たちに伝える必要がある。当たり前な技術の伝承は誰もが忘れがちになることであり、注目される新しい技術を教えていく事以上に難しい。今年度の「魔法の種」の意味はそこにあった。まだまだ魔法のプロジェクトへの若手の参加が十分だとは言えない。次年度の「魔法の言葉」になっても若い学生や先生達にとって参加しやすいプロジェクトであって欲しい。また、魔法プロジェクトでは当たり前になってきた実践を多くの人知ってもらう機会を増やしていければと思う。